

7人制ラグビー セブンズ日本代表 東京五輪への 疾走

体育会ラグビー部
法学部政治学科4年

のくちよしひろ
野口宜裕



2017年10月15日、アジアラグビーセブンズシリーズ
2017スリランカ大会決勝、日本 vs 香港

©JRFU

「7人制ラグビーの日本代表になれる可能性は1%でもありますか」

大学で再びラグビーをやろうと決めたとき、高校時代のコーチに聞いたという。答えは「ある」。

東京生まれ。小学校で野球、中学でサッカー。高校は大阪に進学。ラグビーの盛んな地で、たまたま勧誘を受けて入ったラグビー部。

並レベルの部活だったが、新任コーチの熱血指導で高3時には大阪府ベスト4に。だが大学では、もうラグビーをするつもりはなかった。心変わりは、専大ラグビー部の監督が村田互氏だったからだ。

「入学直前に父から聞いてすごい選手だったということを知りました。そういう方のもとでやってみたら、自分のラグビー観が変わるかなと思って」

さらには、村田監督が男子7人制ラグビー（セブンズ）代表の前監督だったというのも理由。

野口さんの武器は50m 6秒ジャストのスピードと俊敏なステップ。ラグビーと同じフィールドを少ない人数で戦う7人制は、ボディコンタクトが少なく、「自分の武器をより生かせる」。

1、2年次には怪我もあり、ラグビー公式戦の出場はゼロ。だが3年の4月、チャンスが訪れる。7人制ラグビーの大会に出場すると、そこでの活躍が評価され代表候補の練習生に選出。合宿を重ね、ふるいにかけて、正式に日本代表になったのが9月。

それから、アジアシリーズ韓国大会、スリランカ大会、12月のアメリカでの世界大会に出場し、徐々

に手ごたえをつかんでいった。だが、代表争いはし烈だ。

「次に呼ばれる保証はない。一回一回が勝負で練習から気が抜けません」

2月のアメリカ合宿では、地元アメリカやフランスといっ

た強豪と対戦。そこで感じたのは「世界の大きな壁」。だがその一方で、ステップで相手を抜く場面もあり、「自分の武器が通用することもわかった」。

4月のHSBC昇格大会（香港）のメンバーからは外れるが、ダミアン・カラウナヘッドコーチから「しっかりと準備してまた戻ってこい」と言葉をかけられた。もちろんそのつもりだ。

「今年一年は勝負の年と思っています。目標は東京オリンピックへの出場です」

6年前、偶然始めたラグビーの先に、こんな未来が待っていたとは――。

高校で親元を離れ一人大阪へ行ったのは、反抗期ということもあり親との折り合いが悪かったから。しかし、寮生活をしてみて、改めて親のありがたさを感じたという。日本代表に選ばれたとき、誰よりも喜んでくれたのは両親。韓国での代表初トライもスタンドから見守ってくれていた。

